トレンチコート

元内和弘

そこは地上に最も近い地獄だった。何処から揃ってきたかも知れない掃き溜めのような補給品に、戦友の亡骸を蝕んで育った害虫とネズミ。鼓膜ごと脳を破砕する爆発の衝撃波。何処からかこちらを狙っている狙撃手共。ティータイムを楽しみながらクソ見たいな命令しか下してこない上層部、それを黙々と伝えるしかできない、私を含めた狂った上官。

何より耐え難かったのは、そこに自分の足と意思で赴いてしまった事だ。自分が本当に国を愛していると思っていた自分の事が、一番偽善的でバカバカしかったと毎日気付かされるのが、耐えがたい。

冷たくも熱く、血と汚物と腐った肉の匂いで満ちた掃き溜め。ただ死なない為に、ただ死ぬと分かっていながらも、深くも長い穴倉に身を潜ませていた。カーキ色の重たくも暑苦しいトレンチコートで身を包んで、私達は塹壕の中にいる。

今思えば私が作っていたのは自分の為の要塞ではなく、僅かばかり過ごし安い墓だったような、そんな気がした。

人一人が入っても頭が外に出ない、1・5から2ヤード深さの穴を掘る。そして均一な大きさと長さを持つ枝を詰んで斜めの壁を作るのだ。片方は一直線に、もう片方は踏み台を詰んで階段状にする。

この理想的な塹壕は本国の体験博物館に展示されていた。そこでは優雅なティータイムを楽しめて、本も読め、見張り番と交代をしながら快適に過ごせる、と上層部が語る。

「だがそうにもいかない。理想的とは、つまりオペレーションルームの卓上でしか起こりえないという事を意味だ」

雨が降れば泥濘ができ、壁を築いたのは土で詰めた袋だった。片方は、斜めは愚か泥丸出しで凸凹、背中を当てただけで痣になる。もう片方には枝をかき集めてどうにか築いた壁があるものの、既に何十に渡る砲撃で所々崩れかけていた。

「おい静かすぎるぞアラパート二等兵。上官を無視するとは軍記が抜けてるんじゃないか」

何時間もの砲撃と突撃が繰り返されたその日、夜は静まり返っていた。砲撃の音が遠くで聞こえはしているがこの近くではない。

余りの気楽さに思わず乾いた笑みを零しながら隣に座っているガキの肩を軽く叩いた。すると全身が凍ったように固まっては塹壕の壁から滑り落ちる。足場のない泥濘で地に帰るように寝転んだのだ。

「何だ、死んだならそう言えってんだ紛らわしい」

生き物の意思を感じさせない光を失った瞳が泥に沈んでいく。闘志は既に乗っていないのにも、手だけは縋りつく様に銃を握ったままだった。絶望も希望も神経と共に削れてもう残っていない。何とも気持ちの良さそうな顔である。

戦友なら遺体を抱いて泣きじゃくりながら感傷に浸りたい所だが、どうせ配属されてきたばかりの新兵だ。同じ祖国で生まれ、国の為に戦い出向いた、たった30を超えていない、人生で最も輝かしいはずの青春を過ごすべき若者である。

「すまん」

同じ国の者として可哀想だが、最初の何回はともかくこう数年も立て続けて起こるような出来事に一々反応してられないんだ。言い訳ではなく、心の底から私はそう

納得している。
「だから、そんな目で見てんじゃねぇよ」
回りには他の兵士達も俯いていた。俺と同じく国の未来と呼ばれていた奴等である。こんな仕事本来なら部下にさせるべきだが、皆先程の砲撃で完全に憔悴していた。俺の中隊でもない奴すら混じっている。
それもそのはず、前の隊員の半分以上が死んで補充された増員だ。こんな激戦が初陣など、上の連中の気が知れない。そんなの引っ張る側も負担になるに決まっている。今も俺の中隊は文字通り壊滅状態だ。訓練所から知った部下200いたのが80も残っていない。
「増援に来た貴様等が悪いんだからな。貴様みたいな役立たずが増援に来なかったら戦争が終わるのに。だからイギリスで大人しくしていれば死ななかったのに」
銃と銃弾、何よりも認識票を回収して死体を塹壕の上に運ぶ。自分でも何処にあるのか分からない程に遠くへ投げ飛ばせれば良いのだが、そんな腕力はない。何よりも、俺まで塹壕の上に頭を出して一緒に死ぬのだけは嫌だ。故郷に五体満足で戻りたいんだ俺は。
(まぁ、こいつもそうだっただろうけど)
「やっぱ死んじゃったか」
どうにか転がしていると後ろから両手が伸びてきて、死体の下半身を押してくれた。転がっていく死体を確認する事なく、蹲るようにして壁に背中を当てる。
「やけに愛国心に満ちてたからな。ここに来てからはずっと陰鬱になっていた。それに」
来てから二日当たりから良く咳をしていた。馴染みの流行り病だろう。このソームの塹壕に来る前、フランス軍達のいる塹壕はかなりそれでやられたと聞く。我が軍はマシな方だが、それでも酷ければ新兵の3割り以上が銃ではなく病気で死骸となっていくのを見てきた。
「認識票、袋に集めて置けってよ」
「知ってる。まあ回収できた分は回収しなくちゃな」
短いブロンドの髪を完全に泥と塵で染めた男は、同じ村出身の幼馴染デールだった。階級章を横目で見やると幸い俺と同じ少尉である。功績でも取られて昇級していたらと焦った。
「夜食でも食べるか？」
「中隊長自ら逸脱か？　示しが付かないだろ。上層部のお偉方から学べってんだ」
「何を学ぶべきだ？」
「馬跳びしながら何の役にも経たない作戦を練るのに勤しむんだよ。参謀将校の鏡だろ？」
奴は軍装から四角いビスケットを持ち出す。銃床でどうにかその煉瓦並みの食べ物を細かく叩き割った。水でも沸かして浸したい所だが、できない事を嘆いても狂ってしまうだけだ。
「この冷たい茶に浸すのが精一杯か」
俺はデールのビスケットを取って自分の茶に入れる。少し待てばある程度柔らかくなるのだ。冷たくも不味いという事実は変わらないが歯が欠けるよりはマシだろう。
「さり気なく他人の食料を取るな」
「以前俺のを取ったじゃないか」
「それはそれ以前お前が私の物を取ったからだろうが」
「こんなゴミ取ったくらいで怒るなよ」
「何故私のゴミを取るんだ己は」
「俺が特別に捨ててやってるんだから遠慮するな」
「お前それは！」
ベルトのポーチから缶詰を取り出すと奴が嬉しそうに笑った。塩漬けにしたクソの塊、通称コーンビーフの缶詰である。一様塩の中に一部の肉味がついている美味しいカスだ。戦場に出てから一番好きになった食べ物である。
一日前に火にくべて中身はちゃんと調理されているはずだ。恐らく、多分、大丈夫そうに見えなくもないし、食べても直ぐに死ぬ事もないと思われる。
「何だよ。さっさと渡せ」
「それより大隊長から何か命令はあったか？」
「一つ、オペレーションルームから至急な命令が下された」
「もしかして明日の作戦に変更でも？」
缶詰の肉を水でふやかしたビスケットと共に口に運んでいたデールが一瞬にして目を鋭くさせた。至急な命令だってのに呑気に伝達事項よりも食事を優先視させている。
「いや、実は今日の砲撃に、上層部からの伝令があってな」
「待て、今日？」
「ああ今日だ」
「今午後11時を過ぎだぞ？」
「だから、先程行われた交戦に関して上層部の対策が先程降りてきたんだよ」
ふざけた話だった。最前線で様相を報告すれば、いつかはその対策が降りてくる。問題は命令が帰ってくるのが遅すぎるという事だ。状況終了後になってようやく対策が練られる事態がたたある。
それも将校共の顔色でようやく気付けたくらいだ。実際にはかなりの数起こっているのだろう。
「ぷふっ。ははっは。面白い。面白いジョークだ」
「くすッ。クスクス。全くだ。状況終了後になって命令

が下りてくる度に笑っちまう」
　互いの顔を見つめて、ふざけた話に思わず笑いが込みあがってきた。最初は乾いていたそれが、次第に声を抑えた大笑いへと変わっていく。
　面白くもなんともない。ここが戦場でないなら笑っているはずがない。できれば後方のオペレーションルームの周辺に地雷を埋めて置きたい心情だ。けれど、仕方ないではないか。自分の意思に逆らって込みあがってくる笑いは、もう仕方ないではないか。
「それで？　そもそも何故ここに？」
　出合ったからこそ親しく会話をしているが、同じ中隊とは言え待機位置には少しの距離があった。就寝すべき時間に勝手に動くのは、それが小隊を引っ張るべき少尉だというのは感心しない。
「周囲に配属されたと今更知ってな」
「そういえば同じ地域出身を押し込む事がトレンドらしいな」
「死ぬ時は私達皆一緒に死ねる様に、仲間同士絆を感じれるように、そういう配慮かもな」
「そりゃ良い。戦争が終わったら俺達の街には男が爺しか残らないな。国を傾かせるには最高の作戦だ」
「って事は生きて戻れた私達は沢山の女性に囲まれる、正しく両手では抱えきれない花畑が広がる訳だ」
　この場所から私達の街に帰るんだ。そこで腰のラインが美しく、パーマの似合う素敵な女性と廻り合う。花束と手紙を送り、一緒に美味しいランチとティータイムを楽しめればなお良し。そうやって楽しい時間を一杯にして、聖堂にて式を開く。友達は余り残っていないだろうが、目の前のデールは来てくれるはずだ。
「なーんてな。金もないのに無理か」
「ありえるさ。生きてさえいればな俺達はあの海を超えてイギリスに戻れる。きっとな。このフランスとは永遠におさらばだ」
「永遠に？　俺が聞く限りこっちの食事は中々らしいぞ？」
「悩みどころだな」
　命がけで守ってやったんだから責めて食事と酒とタバコとチーズくらいは無料にして貰いたいものだ。或いは三日で穴の空いてしまう靴下をどうにかして欲しい。どうにかしないと俺とデールもその内雨が来て足が腐り始めそうな物である。
「何か、あったか？　別に敵軍の死体を食べている訳でもないんだぞ」
　顎だけは動かし続けているが、デールの顔は余り浮かばなかった。何かを悩んでいるような、思い老けている様な顔色である。
「いや、妹から手紙が来てな」
「ノエル、元気にしてるか？　確か洋服店で」
「戦場に来たってさ」
　物静かな夜の空気が、もう一度静まり変えるようだった。まだ 17 の女の子が何のつもりで戦場に来たというのか。
「洗濯要員とかだったかな。幸い前線には絶対に来ないらしい。絶対にな」
「そうか。そもそも募集もしていないが、衛生兵とかじゃないのは幸いだな。こんな惨状見せられない」
「当然だろ！　あんな腕っぷしもない奴に人間を担げさせられるか！」
「おい」
　高くなった声を抑えて息を整える。足場の上で両膝を抱えていた上等兵が目を醒めたが、俺達を見ると何も言わずに目を瞑った。
「まぁノエルの事は良いさ。明日の作戦は上でも力を入れている。私達は旗を立てるだけだ」
「そうだな。もう六月も終わりだ。半年が過ぎた訳だからな。クリスマスまでには終わって欲しいよ」
「クリスマスかー」
「すまん。思い出させちまった」
　目を瞑ると幸せな夢を見れる。たまに外れくじを引いてしまって悪夢も見るが、基本は幸せな夢だ。暖かいスープと紅茶そして焼きたての食パン。豊かな香が嗅覚を刺激して、私はバターを塗った食パンを一口で全て喰ってしまう。それでもテーブルの上に暖かな食事が残っているのだ。
「寝よう。テメェーも持ち場に帰れよ」
「まだ交代まで時間はあるさ」
　塹壕の中で壁に背中を預け、銃を握りしめたまま瞼を閉じる。本当なら地面に寝転がって寝たい所だが、いつまた砲撃が始まるか分からない。警戒もしなくてはいけないのだ。
「戦争。戦争……戦争、戦争」
　無意識的にその単語を口にする。何故なのかは自分でも分からない。が、忌々しい言葉は何度も頭の中を巡って、どうしようもない苛立ちを覚えさせる。それを辞めると疲れた身体が数秒で俺を寝かせてくれた。
　目を閉じて暗い世界が真っ黒になった瞬間に意識が途絶える。この時だけは現実で感じる全ての感覚が遮断された。
　火薬のと泥と兵士達の肉が腐る酷い匂いに鼻が曲る事

もない。向こうから見える爆発の閃光と戦場に漂う灰の霧に目を細めなくても良いのだ。不味い軍備品で舌を拷問せずに済む。破れそうに痛む鼓膜で顔を歪ませられる爆発音から解放されるのもまた幸せの一要因だ。

それに何より、何よりもまして、銃の引き金を引かなくて済む。

気付けば懐かしき故郷に戻っていた。夢だとは気付いている。けど無意識的に私は気が付かぬふりを貫いていた。一秒でも長く浸って居たい、そんな夢である。

私はイギリスのリンカーンシャーに位置するスカントソープの出身だ。鉄鋼産業が発展している街だが、それでも森は美しく丘と広がる草原に寝転ぶと気持ちが良い。

父が鉄道工場で一生懸命働くというのに、息子である私が鉄道は愚か海を渡ってしまうとは妙な運命であろう。

父は重労働で鍛えた、私よりも太い腕をしていて、声が一々大きくて困っていた。母はそんなオッサンを愛していて、また似てきたのか一々声が大きい。そんな一々うるさくて、懲りようない家だった。

「私は国の為、世界の為に戦いたいんだ！　何故親がそれを理解してくれないんだよ！」

「戦争では人が死ぬ。お前も死ぬかも知れないんだぞ。ヨーロッパ全域が今ギシギシとした音を鳴らせている」

「人々の為なら本望だ。それに最前線でも我が軍には余裕があると言っていた。何より世界の敵が向こうにあるなら、それを倒す為に死ぬなんて名誉ある事じゃないか。栄光ある事じゃないか！」

「栄誉など知った事か！　貴様は大人しく嫁でも貰って 言う事を聞いていろ！」

不思議と父は分からず屋で、そんでもって正し過ぎた。人は、大人だろうが子供だろうが、いつだって自分の意見と異なる正論に対して強い反発心を抱く。私には戦場で得られるという栄光と名誉が輝かしく見えていた。まるで騎士王が敵を蹴散らすような、そんな物語が自分の中にもあると信じ込んで、いや信じたかったのだろう。

「こんな家出てやる。私は戦場に行くんだ」

「待てニコラスまだ話は終わっていない！　待ってくれ！」

父の言葉も母の言葉も弟の言葉も全て無視してきた。国はいつだって戦場に名誉を語り、希望的でない戦争を見せた事がない。不名誉で残虐なのは敵軍だけだったのである。

なのに、三人はどうして国からあんなにも美化されていた戦場の真実を知っていたのだろうか。この場所に私が求めていた物なんてないという事実を。

「兄さん！」

「悪いが家は任せる。手紙は忘れないからな」

どうせ数年後には徴兵されていただろうが、そのたったの数年でも弟と工場で勤めれば良かった。父ともう少し何かを話せられたら良かった。母にもう少し子供として良き行いをすべきだった。

手紙は、最初の数ヵ月以降書くのを辞めた。どうせ本当の事を書いても軍の方で検閲される。ちゃんと人の扱いを受けているという内容以外は何一つ書けない。母からの返答が届く度に、「読書は欠かさないように」、「前線でもティータイムを持つのは忘れないように」等という内容を見ると、いっその事敵軍の陣地へ突撃したくなる。

我々に、この塹壕に入った瞬間から一切の国に対する愛国心はいなくなった。将校としても、兵士としても、人間としても。

それでも逃げる事はできない。この戦場を離れるのは私にはできないんだ。

弟が徴兵されて後方で勤めている。もし私が逃げたら、もしここを守る事を放棄すれば弟が危険に晒され兼ねない。家族は逃亡者の親として誹りを受けるだろう。

何があっても生き抜くしかないんだ。ここで、この場所で生き抜くしかないんだ。

部下からの声で目を醒めた時はあれから三時間後だった。随分とぐっすり眠っていたらしい。

「63 旅団リンカーンシャー連隊第8大隊、作戦の決行を準備せよ！」

塹壕の中で我々は泥のと土の踏み台の上で息を潜んでいた。七月が始まった朝、私達もピリピリとした空気を纏わせては自分の腕時計を覗き込んでいる。

「何だお前緊張してるのか？」

「してるね。そりゃするさ」

デールも私も隊を任された中隊長という、いわゆる上官の位置に立っていた。作戦と同時に一早く先頭に出なくてはならない。それは自然と死ぬ確立が倍増するという事を意味する。今までは運良く生き残れたが、今日もツキが舞い降りて来るかどうか、それとも神様からの使者が舞い降りてくださるかどうか、そこが肝心だ。

「テメェーは緊張してないのか？」

「勿論、若者達を率いる人間の一人としてはな」

「では兵士としては？」

「震えあがる足がもう 10 本は欲しいな。膝への負担が大きすぎる」

聞こえるはずもない針の動く音が聞こえた、そんな気がした。拳銃を握る両手から手汗が滲みでて、まだ待機

しているだけなのにも心臓が爆発しそうに脈打つ。突撃なんて一度や二度じゃないが、それでもこの視野が狭まって一直線になっちまうような、足元からじりじりと焦げていくような緊張感からは逃れられない。けれど、きっと俺という人間はこれから人を殺しに行こうという時に緊張すらしない人間とは口も利きたくないはずだ。

「爆撃が始まるぞ」

「あのクソったれの茨道でもどうにかしてくれよ」

戦場の後方から数えきれない程の、大きな爆発音の津波が押し寄せてくる。それ等が運んでくる鉄の塊は秒を得ずに戦場に降り注ぎ始めた。雨、いや地面を抉ってひっくり返す数十キロの雹が戦場に降り注ぐ。

応じて、敵もまた砲撃を開始した。砲撃が降り注ぐは「敵」の陣営、「敵」の塹壕ではない。「戦場」その物に降るのだ。敵の応戦意思が同じ雹になり、俺達の方へと鋭くも緞帳な牙を向いてくる。右に数百メートル向こうの塹壕にも爆撃が当たり、パニックに陥った新兵連中の喚きと、それを落ち着かせる怒鳴り声が叫ばれた。

砲弾が着弾すればその音は雷を遥かに上回り、人間等細かく粉砕するだろう。その雹は人間を荒っぽく引き千切り、到底五体を持っていた生き物には見えない布で包まれた肉にできる威力を持っていた。

そしてそんな中でも時計の針は回り、分針が３０分に至る。我々は一斉にホイッスルを口元に近づかせた。銃の銃口を敵軍の陣地に向け、少しでも恐怖を忘れられるように声を張る。

「「「突撃！！！」」」

一気に塹壕全体に、この戦場全体に数百を超えるホイッスルの音が鳴り響いた。

「「「アァァア！！！」」」

ピークに達していた緊張を爆発させるように我々もまた叫びを上げながら塹壕の外へ跳びだす。泥と土と死骸を踏みしめ、塹壕内にある全ての人間が走り出した。

「生きる。必ず！」

向こう側から一直線に並んだ閃光が光った。多少は我が軍の砲撃が通用したのか、弱まった雹の中で、点であった閃光は目に留められない速度の直線を描いてくる。戦場では直角に降る雨、ドイツ軍の機関銃だ。

ただ銃を握りしめて一直線に密集して走る私達にはそれに対抗する手段がない。音速を超えてしまうその銃弾は、俺達が銃の引き金を引いたと気付く前に命を刈り取っていく。

「それでも、これくらいなら、まだ流れ弾も多い！」

明らかに砲撃も、銃の洗礼も以前より弱まっていた。若しくは我が軍の総員で攻撃がどうしても分散されているのか。なんにしても死ぬ確立が下るなら喜び以外にない。

しかし、唇の端が少し上がりそうになった私の目に入ったのは、殆ど解除されていない鉄条網バリゲート達だった。本来の計画通りなら現在敵の砲撃陣地を撃っている我が軍の砲撃が、ここを先に通りやすくしていなくてはならないというのに。

「話が違うぞ！　全く撤去されていない！」

「ど、どういたし……」

「引き返しましょうか？」とでも言いたげな間抜け面で、小隊を引き行っている駆け出しが戦場で助言を求めて来やがった。思わず頭にきて、奴が来ているトレンチコートの襟元を掴みあげる。

「ぶち殺すぞテメェー！　さっさと取り払え！　それしかないだろうが！」

「は、はい！」

着任して数日の人間に何を求めているのか。それでも、冷静でいられる状況でも無かった。幾ら敵軍の攻撃が弱まったとは言え

「っ！」

先程の小隊長がいた場所に砲撃が落ちる。大きな衝撃に私は泥の上で膝を折る。天を見上げれば、先程とは比較にもならない数の砲撃が点となっていた。そしてそれを中隊に伝える暇もなく、雹は勢いを増す。

「中隊長！」

「屈め！　総員匍匐前進し、できる限りの鉄条網を除去せよ！」

命令を下している私が、まるでバカみたいに感じた。部下も命令に従うべく鉄線カッターを取り出すが、一層厚くなった機関銃の弾幕は隙を与えてはくれない。いつの間にかの軍帽が吹き飛ばされたと気付いた時には、もう中隊の６割以上が見当たらなかった。完全に壊滅されている。

「な、何だこれは、話が違う。何故砲撃が強まる？　何故弾幕が厚くなった。まるで」

まるで引き下がれない、鉄条網のバリゲートに届くまで待っていたかのようだった。いや、寧ろそれ以外の理由を考えられない。上層部の作戦が露呈されていたのか、そもそも上層部は作戦と呼べる物を練っていたのは確かか。

私は連隊長が我々を集めて言っていた言葉を思い出した。「砲兵隊に寄って殲滅された陣地に、我が軍は歩いて行けるだろう！　諸君のすべきは軍歌を歌い、旗を立てる事だ！」

作戦室のクソ共はずっと馬跳びでもしてやがるのか！」

小隊長の引き千切られた腕の傍から 小銃を拾い、向こうの塹壕で頭を出している敵軍へ引き金を引いた。こんなにも遠くにいるのにも、その眼球が潰れ、頭蓋が陥没していく姿が脳裏に刻まれる。

「クソが！ また殺させやがって！」

腸を引きずり出されながらも鉄条網を一本一本と切っていく最前線の兵士達。その後ろで私は、命令を下す事の他に何も出来なかった。倒れていた部下を起こす暇もなく、ただ前へと突き進んでいく。

リンカーンシャー第４中隊突撃！！」

鉄条網のない部分には集中砲火が当てられていた。だがそれでもそこを向かって前の大隊は突き進んでいく。それに応じて敵も更に弾幕を張ってくる。鉄条網を取り除き、匍匐前進で泥を口と鼻一杯に詰め込んで前に進んだ。

「中隊長！」

そんな中、私を部下が押し飛ばした。反応する暇もなく、誰かを見る時間もなく、隣に掘られていた穴に転がり落ちる。砲撃が地面に刺さってから爆発して作られたおボウル状の穴だ。

どうにか死骸を踏んで溜まって腐ってしまった水から身を躱す。泥の壁にナイフをぶっ刺しては足場を作って昇っていった。

「感謝するぞ少尉。そしてすまない！」

落ちてから、頭上に機関銃の十字線が通り過ぎて行った。昇り切ると蜂の巣になって、顔も形を変えてしまったのは、いつも明るい性格のアルバートだった。私は目を瞑って敬意を表す事すらせず、その死骸を転がしながら前に進む。気休め程度だが、それでも被弾されるリスクが減るはずだ。

ぐちゃぐちゃになった顔を向こうに逸らさせると声が聞こえる。銃声に集中して耳を防ぐと死体の手が私の首を強く掴んできた。それを払うと、先程逸らした顔がまたもやこちらを向いている。

許せとも言えなかった。けれども、利己的にも恨めとも言えなかった。ただ生きたかった。

「リンカーンシャー第４中隊！ ……」

鉄条網のバリゲートを抜け振り向くと、そこにはもう私の中隊は残されていなかった。遅れてしまったのである。そう、皆が遅れてしまったのだ。遅れてしまった以外の理由は考えらない。でなくては200人いた中隊が数人しか見えないという事実の説明がつかない。

「行こう」

鉄条網を抜けた戦場には、それと言った障害等余りいなかった。せいぜい積み上げられた死体と血で作られた泥、砲弾で掘られた墓塊ばかり。

夢中になって銃を撃ち、前に進んでいると何とも懐かしい後ろ姿が見えた。

「デール！」

「ニコラス？」

まさか最も前に立つ中隊長が二人揃って生き残れるなんて、こんな奇跡を誰が予想しただろうか。

「奇跡ってんなら、この前線をどうにかして欲しかったがな」

「急な地震で敵軍の塹壕と砲台が崩れるとかな！」

機関銃を握っている敵を重点的に狙い撃つ。味方もスナイパーよりも機関銃にのみ全神経を注いでいた。確実に当たるような一撃を繰り広げる剣士よりも、分で数十殺せる化け物の方が恐ろしい。

互いの顔を見る事もなく進んでいるのにも、ただ前だけを向いて走っているのにも、不思議な事に私は頼もしさを得ていた。同じ泥を啜った仲間と立っているという感覚。今度ばかりは敵に殺させないという気持ちが自分を鼓舞させてくれる。

「切り抜け！！」

下から最大限目立たないように手榴弾を投げ、こちらを見た敵兵をデールが狙撃した。機関銃が置かれていた手前の地面に刺さった手榴弾が爆発し、轟音と共に小さな破片がこちらまで飛んでくる。

天から降る泥の雨、その向こうで銃をこちらに向けている兵士が一人塹壕から頭を出していた。銃口を構えようとするも遅い、と思っていたのだが、何か様子が可笑しい。その敵兵は何故かこちらを凝視して笑っているのに、気が抜けたようで、引き金を引こうとはしなかった。その隙を狙って頭を撃ち抜くが、何処となく部下からも見た事のある光景に、一瞬敵を同じ人間だと思ってしまう。

「ぶっ殺されたくなければ動けニコラス！」

「止まってもねぇよ！」

敵は人間ではない。今戦っているのは地獄から這い上がってきた汚物だ。訓練所でそう叩きこんだはずなのに、顔を見た瞬間その決意が緩む。刹那の間だけれども、考えてしまうのだ。もしかすると敵軍も、似たような訓練を受けてでてきただけの、国の命令で戦うだけの青年ではないのかと。

そんな知らんぷりをしていた「当たり前」を認識してしまうのである。

首を少し振って雑念を消し、敵軍の塹壕を守る最後の鉄条網を超えた。手前まで来た事に気付いた兵士がこちらを向くも、もう遅い。敵の銃口が向けられる前に、デ

ールと私は同時に左右に弾を撃ち込んだ。両方どちらの敵も一人ずつ、確実に撃ち抜いていく。
　引き金を引いて、ボルトで空薬莢を排出すると同時に装填を終わらせた。４人撃ち抜くとボルトが止まる。弾薬が切れた瞬間に敵軍の死骸をひっくり返し、落ちていた銃の引き金を引いた。続々と我が軍が塹壕になだれ込む。
「ようやく、最初か」
「ニコラス！！！」
　聴き慣れた幼馴染の声が名前を呼んだ。一息ついて緊張の糸が切れた隙間、後ろから腰に誰かが抱き着き、地面に倒れ伏す。間近で砲弾の音が鳴り響き、一瞬にして意識を持っていかれたのはその次の出来事だった。
「デール」
　敵の塹壕に頭を埋めて、目を醒めてもなお銃声と爆発音は続いている。
「デール？」
　軍装並みに重い何かが後ろから私を圧迫していた。身体を動かして向きを変えると、火薬と塵で真っ黒に染まった天が広がる。視線を少し下に向けると、そこにはデールが気絶していた。
「男に抱き着くなんて、そんな趣味はなかったはずだが？」
　冗談めかして茶化しながら身体を少し揺らしてあげるが、意識は全く戻ってこない。一旦起き上がらせようと肩を掴むとぐったりとしていながらも、割と簡単に上から退いてくれた。
「しかし、何だ。妙に疲れるな」
　足は軽いが、どうもデールが乗っかっているせいか上手く動かせない。少し動かすと痛みが走り、骨折してしまったのではないかという不吉な感覚が襲ってきた。こんな所で負傷など、感染で死んでも可笑しくない。
「これじゃ、私は後方に移送されるかもな」
　デールはずっと何も言わず黙っていた。
　手を地面に置き、どうにか上半身を起こす。自分の足に目を向けると足の裏がこちらに向けられていた。臑の当たりが見事に圧し折られ、殆ど千切られている。それでも痛みを感じれないのは、誰かが止血用に膝下へ強く締めておいたベルトのお陰だろう。
「全く余計な事を。ズボンがズレ落ちて戦えない何て言うんじゃねぇぞ」
　隣に倒れていたデールを見下ろすとその手がベルトを強く締めていた。まさかこれを貸しだとか言って一生出しに使う気なのではないだろうか。
　苦笑しながらもそんな事を考えていた私の目に、不自然さが入ってくる。デールの足が何処にも見当たらなかったのだ。腰の方に手を伸ばしてみても、その下がない。あるべき場所に、あるべき物がない。
「なんだ」
　周囲を見渡すと塹壕の足場にデールの靴を履いた足首だけが置かれていた。腰から足首の間を繋ぐ部分は、もはや残されていないだろう。
　半分くらいは千切られたトレンチコートを捲ると、そこにはただのクソが詰まった長い細い袋だけが散らばっていた。数分前まで戦場を駆け、昨日まで共に語り合い、数年前共に入隊した友は、鉄の塊が落ちた事で消えたのである。
「お前も死んだのかよ」
　ここは敵の陣地だ。敵が自分の塹壕に砲弾を撃ち込む事は決してない。砲撃は後ろから降ってきた物だった。最前線の状況を知らない砲兵部隊の砲撃が、目の眩んだ誤射となって降りかかったのである。
「だから、そう言ってんだ」
　デールの瞼を降ろさせ、落ちていた銃を杖にどうにか塹壕の壁に背中を預けられた。ベルトを握っていた手を放させ、上半身だけでも楽に寝られるように態勢を変えてやる。強く絞められているベルトには、少し血が滲んでしまった手紙が刺さっていた。実家への手紙である。私はそれをシャツの中に入れてから目を瞑った。

　名誉ある勲章を授けられた。横になっていた時、最前線にいた時は一度も来なかったような上の偉い方が、直々に枕に置いて行って下さった勲章である。勿論宣伝用の写真も撮った。
「成程、こいつを胸元に掲げていると死体も探せられない仲間達に自慢できそうだ」
　さぞかし羨ましそうな目で戦場で活躍できなかったのを悔むだろう。
　隣に全身に包帯をして、指すら動かせない兵士もいたのだが、彼は残念ながら余り勇猛では無かったらしい。
　我が誇り高き第８大隊、いやリンカーンシャー連隊は希望的に見積って７割り以上が一夜で消え去ったと聞く。まだ確認作業中で、認識票を探すだけでも一苦労だという。人間だが、おおよそが数にして２２００人、全体からは５００００以上という推察だ。正式な数となると実際は一割以上増えるだろう。
「一列に並び、歩いて塹壕まで迎え。ってか」
　何て素晴らしい命令だ。あの混乱の中で、素直に従っていたなら敵軍をもっと喜ばせられた物を。
「まだ本人に渡っていない贈り物の変換はいつだ？」

５万人が家族に送った手紙、家族が送った５万への手紙と日用品や本等。後方で洗濯されている彼等の服や品物、その全て持ち主のないゴミと化した。フランスの、ソームという土地で、私達は寝転んでその地を埋め尽くす。

あそこはこの世で最も地上に近い地獄だった。如何なる戦場がそうであるように、あらゆる戦闘がそうであったように、どのような戦争でもそうあり続けるだろう。

「こんな物が、必要……か」

ベットの上で目を閉じると、このような状況なのにも心地の良い眠けが私を襲ってきた。塹壕の中で何週間も柔らかくて凸凹でない場所に寝た事がないせいで、身体がベットを求めている。

「何故ベットの上で寝られるのに戦争なんかが必要なんだろうな、デール」

ふとベットの上でそんな事を考えた。考えても尚、どうしようもない事を亡き者に問う。

「ただ」

今はただ身を任せたい。日差しの差す病院の中で過ごす、平和に見える時間の中で何もかもを手放したい。銃声も砲火も弾幕も着弾音もない場所で、殺した敵軍の顔も死んだ仲間の声も忘れられる気持ちを抱いたままに。

今はたったの二文字でできた忌々しい行為の事を忘れていたい。愛国心も、正義も、大義もないこの場所で。利益と思惑と欲望と死だけが蔓延するこの場所で。